

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2021/09/08 ～2021/11/28)

導入

皆さんこんにちは。私は今国際教養学部に所属していて、ライプツィヒ大学に留学しに来ています。初回では、生活、学業の様子に加えて、なぜドイツを選んだのか、などについて書ければいいと思っています。よろしくお願いします。

目次

導入

なぜドイツ

どのようにドイツ語を勉強したか

生活の様子

学業の様子



Universität Leipzig ライプツィヒ大学

なぜドイツ

「なんでドイツなの??」最もよく聞かれる質問のひとつ、そして最も答えに窮する質問のひとつです。あえて理由を見つけ出すとすれば、ドイツ語を勉強していたこと、またありきたりを避けたかったということ、この二つが考えられます。ただ、最終的には、うっすらとした興味がずっと心にあってそれでドイツに来ました、と言うほかありません。

もちろん、ドイツ語を勉強していたというのはひとつの大きいきっかけでしょう。もともと大学で中国語をとりましたが、同級生の前で中国語で何かを発表することが怖くて、嫌になり、やめて、何か別の言語を独学しようと思いました。そこで手に取ったのがドイツ語の参考書でした。独学なので、発音をあまり練習せずにする、それでいてやりごたえのある文

法の難しい言語として、選んだんだと思います。またフランス語とドイツ語で悩みましたが、当時、ドイツ人は日本人に似ているという謎の思い込みがあり、親近感があったのもその理由のひとつです。そしてそれがなぜか続いたわけです。私は怠惰なので、数々のブランクを経験しましたが、やめてしばらくするとまた勉強する意欲がわき、を繰り返し、そのうちドイツそのものにも興味がわき始めました。

またもうひとつの理由として、ありきたりな国を避けたかったという思いがありました。ずっと非英語圏へのあこがれもありましたし、なにより英語以外の言語で留学できたらカッコいいという、かなり単純な欲求がありました。

ただ、もっと説明できない何か感覚がありました。他の国ではなく、ドイツに行ってみたいという不思議な感覚です。私の専攻は、都市計画なので、選択肢としてチェコのオストラバ大学や、フィンランドのセイナヨキ応用科学大学などを考えました。しかし結局のところ、自分はただただドイツに行きたいと思っているということに気が付いたので、ドイツを留学先として選びました。

ちなみに留学にくるまでは知りませんでしたが、ライプツィヒには Anglistik というイギリスについて学ぶ学科があるので、英語の授業のみで留学することも可能です。私の知り合いの日本人にはそういう人も多くいます。

以上が私がドイツを選んだ理由です。見直してみると、あまり参考になる説明ではないかもしれませんが、無理もありません。私自身はっきりとした理由はもっていないのですから。いつもこの質問を聞かれてうろたえています。もし私がポケモンだったら、「どうしてドイツなの？」という技は、こうかばつぐんでしょう。ただ、あいまいでも十分留学を目指す資格があると思います。実際こっちでの生活は面白く、来てよかったと思っています。時には、理由がわからないけど好きという感情を信じてみるのもいいかもしれません。



旧市庁舎, ライプツィヒの道

どのようにドイツ語を勉強したか

私はそこまで網羅的に各参考書を使用したわけではありません。なので、以下の文章は、絶対的に信頼できるアドバイスとしてではなく、例えばこういう方法で勉強した人がいる、という、ひとつの目安として、見てもらえればと思います。

単語、文法、試験について簡潔に紹介

単語

新・独検合格 単語+熟語 1800

この単語帳がおすすめです。私はこれを一通りやった後、独和辞書を買って、追加で重要単語を覚えていきました。英語と違って、本屋に行ってもそこまで単語帳が充実していないので、基本を覚えたら、あとはいきなり辞書を買って勉強するといいと思います。ちなみに、独和辞書としては Apollon を使っています。

文法

本気で学ぶドイツ語 → しっかり学ぶ中級ドイツ語文法

この「本気で学ぶドイツ語」を書店で手に取ったところから、私のドイツ語学習が始まりました。これを一通り仕上げた後、「しっかり学ぶ中級ドイツ語文法」に移りました。この間、何度も勉強を中断したので、2冊すべてを読み通すのにだいぶ時間がかかりました。おそらく2年程度はかかったと思います。

試験

独検3, 4級同時 → 独検2級 → Goethe Zertifikat B1

まず勉強を始めて1年くらいしてから独検3, 4級を同時に受け、4級だけ受かりました。3級を受けなおすのが面倒だったので、次いきなり2級を受けました。これに合格し、少し試験を受ける意欲がなくなりましたが、さらに1年後くらいして、ようやく Goethe Zertifikat B1 に挑戦しました。…まあ落ちました。そんなわけで今は独検2級の資格しかもっていません。

その他参考書

独検対策2級問題集[改訂版]

独検対策準1級・1級問題集

独文解釈の研究

耳が喜ぶドイツ語

その他学習材料

Podcast ZDF heute journal

Youtube DW

Youtube Easy German

エーリッヒ・ケストナー



環境デモの呼びかけ、朝のライブツイヒ

各分野について詳しく紹介

単語

辞書による単語学習は、市販の単語帳に慣れたあとに使うといいと思います。基本的に全部そうですが、単語に関しても私は、**新・独検合格 単語+熟語 1800**を一通り読み通すだけでかなり時間がかかってしまいました。なぜなら、ドイツ語の単語はひとつひとつがよく似ていてややこしいからです。

ただ、徐々にですが続けていると、ドイツ語的な法則が頭に入ってきて、そうなる前よりも新しい単語を覚えるのが楽になります。そのような状態になったあとに、辞書を使うと、とても楽に単語を覚えられるかと思います。私は、過去形や過去分詞をなんとなく理解できたり (fahren-fuhr-gefahren など) 似ている動詞を識別できる (ausmachen と anmachen の違いなど) ようになってから辞書を使い始めました。

ちなみに、辞書を使うといっても、いきなり何万もの単語を相手にするわけではなく、色がついているような、重要単語を重点的に覚えていく形になります。基本的に、市販の単語帳では、1000—2000 程度の語彙数しか得られません。辞書に載っている重要単語は 4000—5000 程度になるので、市販で得たドイツ語の基礎単語をもとに、さらに語彙を増やしていくことができます。

参考書

独検対策 2 級問題集[改訂版]はおすすめですが、独検 2 級を受ける時点では難しすぎたので、2 級を受ける前に完璧に理解できなくても大丈夫だと思います。この級を受かった後も、この参考書は依然やりごたえがありました。

耳が喜ぶドイツ語もやりましたが、ドイツにくる直前でもなお難しく感じていました。理解できなくて当然くらいの気持ちで聞くといいかもしれません。

独文解釈の研究は、ある程度、関係文を含む文章が読めるようになってから解くと、面白く感じると思います。逆にそれ以前に挑戦してもただただむずかしくつまらない参考書に思ってしまうのではないのでしょうか。

本に関しては、大学の図書館で難しい本を闇雲に読んでいました。最初は、エーリッヒ・ケストナーという、ドイツの子ども向け小説作家の書いた本を読んでいましたが、彼の本は私にとっては中途半端に簡単すぎて、読む気力が維持できませんでした。なので、私は、大学の図書館にあった、詩人の Rilke について書かれた本を、意味も分からず、読み通しました。ケストナーを読んでみて、自分に合わないと思ったら、別の本を探す、という流れで読書に挑戦するといいいのではと思います。

また Podcast にある ZDF の Heute Journal を意味も分からずに聞き続けました。

あとは、Youtube で自分に合うドイツ語の動画を見ることもできます。私は度々 Easy German を見ていました。

C1 レベルの友人のやり方

ドイツで知り合った C1 レベルの友人のやり方を紹介します。彼は、まず Easy German を見て、わからない単語全部調べてまた見返し、内容を聞き取れるようにする、これを断続的に 1 か月続けると良い、と言っていました。

この章のまとめ

ドイツに来る前に、完璧にドイツ語が話せるようになる必要はありません。私はというと、結局 B1 程度の実力でドイツに来ました。それでなんとかなっています。さらにいえば、不十分な私のドイツ語が成長していく過程をひしひしと肌で感じられるのでむしろ楽しいくらいです。

そもそもドイツ語まったく話せずにドイツに来ている人も多いです (Anglistik という英語の授業を受けている)、ある友達も B2 の実力があるとみせかけて、留学に来ています。彼はおそらく B1 くらいの実力です。

なので私は語学がまだ不十分だから、、、と臆することなく、気軽に来てしまえばいいと思います。なんとかなります。というか、大学に入って以降にドイツ語を始めているなら、完璧になる前に卒業してしまう可能性が高いので、むしろ皆できてないし、できなくて当然位の心持で、留学を目指すといいいと思います。



路上で売っていたアイス ドイツではアイスが人気で、そこらじゅうで買えます

生活の様子

ドイツ到着前後の9月から、冬学期が始まる10月の半ばあたりまでを書きます。

9月

渡航直前

コロナウイルスの影響で、本当に渡航できるか、直前まで分かりませんでした。そのせいか、渡航する最後の瞬間まで、留学しに行くという実感が湧きませんでした。幸か不幸か、そのおかげで特に不安なども感じずに済みました。ちなみに9月上旬に渡航しました。

渡航直後

日本学科の人が初期の生活をサポートする役割で迎えに来てくれました。彼らは日本語が堪能だったので、難なく会話が出来ました。多少の緊張や不安はあったものの、バディが必要なことをすべてサポートしてくれたので、安心してスタートを切ることができました。また、やっとドイツに行くことが出来たので、やや興奮状態でもありました。



私の住む部屋

数日経過

渡航が遅れた影響で、着いて2日くらいですぐに Sprach- und Orientierungskurs（会話とオリエンテーションコース）が始まりました。ややめまぐるしかったですが、まだ興奮状態の中にあっただので、割と活力もあって、負担は感じにくかったです。

Sprach- und Orientierungskurs 期間中

恐らく、現地での人間関係がまだ十分に構築できていないこの時期が、留学で最も苦勞する点だと思います。かくいう私も、この期間中に、何度か落ち込むことがありました。うまく友達が見つけれなかったからです。それについては、この章の最後でいろいろと書こうと思います。

また、このオリエンテーション期間に、ドイツでの生活の準備を並行して行っていました。Straßenbahn（路面電車）のチケットの買い方に慣れたり、Simカードを買ってスマホの電波がつながるようにしたり、スーパーでの買い物になれたり、などなど。あとは、外国人局

で滞在許可を得るために、必要書類を提出したりしていました。この留学の初期の時期は、孤独でしたが、新たな地で自力で生活している状況が、独特の楽しさを私に感じさせました。

ほかには、またオリエンテーションの期間中に、もとより訪れる予定だった Das japanische Haus(日本の家)に行きました。コロナ禍で長いこと閉まっていたようですが、私がドイツに来た前後で再び営業を再開していました。日本の家は、レストランではないですが、食事が出てきて、そこにいる人たちといろいろ話したりできる場所です。いろいろな人がいて、私はそこで、ライプツィヒ大学とは無関係の別の日本人留学生とも知り合いました。私が到着して少ししてから、日本の家の10周年を祝うイベントがあり、それにも手伝いとして参加して、飲み物を売りました。日本の家は、治安の悪そうな場所にあり、普段は人も少なく、ドイツ人しかいないので、割と敷居が高いかもしれませんが、思い切っていってみると、いろいろな人と知り合えるので面白い場所です。



日本の家, 料理

冬学期直前

さて、オリエンテーションコースは9月30日に終わりました。このコース自体の内容は学業の様子に譲るとして、その続きを書きます。Sprach- und Orientierungskursが終わってから大学が始まるまでに1週間の休みがあり、その期間中、ベルリンに日帰り旅行に行ったり、日本学科のJAALという団体が企画してくれたBBQに参加したりしました。

このころは、ようやく Sprach- und Orientierungskurs が終わり、一息つくとともに、これから始まる大学生活にやや不安を感じていたと思います。

冬学期開始

個人的には、大学が始まってからは更に生活が大変になるかと思っていましたが、意外と Sprach- und Orientierungskurs のときに比べ、生活に慣れてきたこと、知り合いが増えたことなどから精神的負担が減り、楽しく過ごせています。授業のほかには、週末旅行に行ったり、クラシックに詳しい友達とともに Gewandhaus という場所にオーケストラを鑑賞しに行ったりと、とてもユニークな生活を送っています。

また、10月の終わりくらいに、JAALが Tandem Speed Matching というイベントを開催してくれました。日本人留学生と、ライプツィヒ大学日本学科の人との交流会のようなもので、そこで知り合った人のうち数名と現在タンデムを行っています。生活の概要は以上です。

以下に、友達作りについていくつか文章を書きます。

友達作りについて3つの文章

Sprach- und Orientierungskurs 期間中の友達作りの感想

頑張って何人かに話しかけ、少し仲良くなったように思っても、言葉の違いなどに阻まれ、それ以上仲良くなることができなかつたことが度々ありました。皆、同じ国同士で固まってしまう傾向があったので、その輪の外に放り出されてしまう感覚です。最初話せていた人と話せなくなるのはわりと辛いです。実際これはかなり大きい負荷をもたらしました。ひとたび、人間関係に落ち込むと、他人と話す気力を失い、それが結果的にますます自己の孤立を深めるといふ悪循環に陥ってしまうと思いますが、私もこのとき、少しこの状態にはまっていた。

そこで、取った対策としては、疲れたら趣味の一つでもある音楽を延々と聴くこと、また、無理に人間関係に固執せず淡々と生きることです。そうやってしばらくすると、また少しだけ、他人と会話できる瞬間が生まれます。他人と会話できることは、少し精神に回復をもたらし、もう少し自分も他人と話そうかなという気力を呼び覚ましてくれます。

ある意味、留学においては多種多様な人がいるうえ、平均的に見れば、日本人より会話に積極的な人も多くいます。焦らずに待っていれば、会話のチャンスというのはまた訪れるものです。そのうち私は一人のアメリカ人と知り合うことで、ようやく友達を発見しました。このコースが終わった今も、時々彼と会話しています。また、後からきた日本人数名と知り合い、仲良くなったので、徐々にこうした問題は消えていきました。ひとまずは、以上が Sprach- und Orientierungskurs 期間中の友達作りについての感想です。



ケルンに友達と旅行に行った際食べた寿司

友達作りについての考え

次に友達作りそのものについての私の考えを述べます。私は、ほかの人の留学報告書を読むとき、皆がどのように現地で友達を作っているのかがずっと不思議でした。

それに対し、今の自分の観点で何かを答えるとするれば、自分から心を閉ざさない限り、誰かしら話せる人はいると思います。本当に多種多様な人がいるからです。なので目をむける

べきは、他人というよりむしろ自分の方ではないかと思います。具体的には、自分から心を閉じたくなくなってしまう瞬間について考えるべきだと思っています。人とうまくかかわれな
いと、自分だけが孤立しているように思ったり、人と話したくなくなったりするかもしれません。こういうときは、無理に状況を変えようとせず、いったん孤立している状況を受け入れて、気長に待つのも手だと思います。無理に神経すり減らして人と関わろうとして、さらに疲れると、今度はせっかく留学生向けのイベントがあっても行く気が起きなかったりするなど、さらに人と出会う機会を失ったりして負の連鎖になってしまうと私は思います。焦らず、自分から孤立することなく、適度に機会を待っていただければいいと思います。

あとは、他に留学に来ている日本人と話すこともおすすめです。他言語を使う場合に比べ、気楽に会話でき、また他の人も案外いろいろ苦労しているものなので、そういうことを知ると自分だけが大変なわけではないとわかって気が楽になるかもしれません。



ライブツィヒのとある公園

異文化交流について

異文化交流のコツについて書きます。

外国人の友達を作るといのは、想像以上に困難なことです。このことを身をもって経験しました。同じ出身国の人がいるとどうしてもその人たち同士で結びついてしまいます（私もそう）。

もともと、その壁を壊してみたいという意味合いもこめて、別の文化圏の人と積極的に話すようにしていましたが、少なくとも Sprach- und Orientierungkurs においてそれはうまくいきませんでした。もしあなたが我こそはその壁を乗り越えると思っているなら、いくつか Tips をあげようと思います。

まず第一に、知っておくべきことは、輪の外に放り出されてもあわてないということです。同じ出身国や、似た地域の人間が大人数いると、そこでグループが出来てしまって、それ以外の人は入りづらくなります。例えば、私は最初一対一で話しかけて少し仲良くなったフランス人がいましたが、彼がフランス人のグループに行ってしまうとき、私はそこに入れませんでした。私はフランス語も話せないし、そうでなくても、同じ文化圏の人同士で話している場所に突入するのは困難を極めます。私にはそれができませんでした。そしてこれが、輪

の外に放り出されるような感覚を私に与えたのです。

一応言っておくとフランス人は皆優しくかったです。フランスはドイツから近く、そのため多くのフランス人がドイツに来ます。彼らはしたがってグループを作りやすく、私とその集団に入れなかった。ただそれだけの話です。

つまり、認識すべきは、別に彼らは私のことを嫌ったり、適当に扱いたいわけではなく、ただ単に同じ国の人と会話するのが楽で、かつ楽しいからそうしているだけだということです。状況が変われば私だって同じことをするでしょう。つまり日本人が数人いれば私もそこで輪を作ってしまう。それを他の国の人が見たら、やはり入りづらいと感じるのではないのでしょうか。私は別にそういう人たちを除外したいと思って日本人で固まっているわけではなく、単にそのほうが会話が楽、かつ楽しいだけです。

この現象をあらかじめ頭に入れておくと異文化交流のひとつの助けになるかもしれません。私は今でこそ、同じ国でまともになってしまうことについて多少理解できるようになりましたが、留学当初は、それが分からず、単に彼らは私と話したくなくなったんだと思って、落ち込むことがありました。しかし、後からほかの日本人が来てみて感じたのは、自国の言葉で、同じ文化圏の人と話すのは、やはり楽し楽しい。これはそうになってしまう一種の傾向でどうしようもないことです。なので、向こうの国のグループに混ざれなくて当然であるし、それによって落ち込む必要もあきらめる必要もないと思います。再び一対一になったとき、気楽に話せばいいのではないのでしょうか。このことをまず念頭に置いておくと、いろいろと文化的背景の異なる人と関わるうえで役立つと思います。

あとは、同じ日本人で明らかに外国人とコミュニケーションが上手な人がいるかもしれません。そうしたら、その人を観察して、勇気をもったり、参考に出来るかもしれません。

さらにいえば、たとえコミュニケーションが不得手でもできることはあります。日本人とよく関わっておいて、彼らを通じてドイツ人と会うことができると思います。一人では、なかなか外国人と関われなくても、友達と一緒になら関われるかもしれません。

またこれは、別にやらなくても大丈夫ですが、十分な時間がある場合、ドイツ語に加え、何か他の言語を勉強していると友達作りの助けになります。完全に習得はできなくても、いくつかのフレーズ、言い回しを知っているだけでもコミュニケーションの助けになるのではないかと思います。とはいえ、あまりプレッシャーに思わないでください。これはあくまで、時間があって、かつ言語が好きな人向けの話で、私はというと、ドイツ語、英語以外何一つ知らずに生活しているので、できなくても全く問題はないです。気楽に海外を目指しましょう！

補足

ここまで読むと、あなたは、私が外国人との会話をあきらめ、日本人とばかり話しているという印象を持つかもしれません。しかしそんなことはないですよ！もとより、外国人と話すことが好きです。なので Sprach- und Orientierungkurs でこそうまくいきませんでした

が、のちに BBQ で知り合ったドイツ人と一緒に旅行したり、日本学科の人とタンデムをやったり、語学学校で文化の違う人にいろいろ話しかけたりと、色々な形で外国の人間と関わっています。色々試行錯誤して、文化の壁をのりこえようとしています。案外人間はそんなに違わないものなはずですが、同質性に規定されて交流をあきらめてしまうことは、もったいないことではないでしょうか。

最後に

この章で、いろいろと友達作りについて書きましたが、かくいう私が日本ですら友達作りが苦手で、人とあまりかかわってこなかった人間です。そんな私でも、この地でいろんな人と会って、留学を楽しめているので、案外、そんなに怖がらなくてもいいのではないかと思います。

学業の様子

Sprach- und Orientierungskurs について

大学の冬学期が始まる前に、3週間ほど語学学習のコースがあります。出席は任意で、大学出願時に、このコースに出るかどうかが選べます。オンラインで事前にテストを受け、その成績でクラス分けが行われました。私は B1 のクラスに振り分けられ、授業自体はそこまで難しくなかったです。内容は多岐にわたり、Youtube で曲を聞いて、歌詞を聞き取ったり、文章を読んで穴埋めをしたりしました。またペアを組んで交互に質問する時間が多くありました。フランス人が多く、彼女らの多くはドイツ語が上手でした。途中、小旅行としてドレスデンに行きました。

冬学期

大きく分けて、大学での講義と、語学学校での授業があります。

大学での講義

Stadtentwicklung und Bauwirtschaft=StuBa (都市開発と建築経済)

Lexikologie (語彙論)

Mathematik 1 (数学)

の三つの授業を取っています。

StuBa は経済学部の中の科目で、私の専門として授業しています。Lexikologie は文献学部の Herder-Institute から、また Mathematik 1 は物理学部の留学生向けの科目です。それぞれ自分が面白そうだったものを受講しています。

StuBa は Vorlesung (講義) とグループワークから構成されています。ライプツィヒにあれば分かると思いますが、Bayerischer Bahnhof (バイヤリッシャー バーンホーフ) という場所があります。立派な門がある割に、何の場所かよくわからない土地です。今学期ではここに焦点をあて、どのような都市開発が望ましいか議論していくようです。

当初英語で授業をやるものだとおもっていましたが、蓋を開けてみたらほとんどドイツ語でした。また自分以外受講者はおそらく全員ドイツ人です。極めつけは、国際教養学部での授業に似ていますが、グループワークが中心の授業である点です。そんなわけではじめは、本当に自分がついていけるか疑問でしたが、思ったより同じグループの人がフレンドリーなのでなんとかなっています。まあ、せっかく留学に来ているので、こういう冒険があったほうが楽しいと思います。

Lexikologie は、Vorlesung (講義) と Seminar (演習) から構成されています。ドイツ語です。これまた Seminar にてディスカッションなどをする必要がありますが、こちらは留学生も多く受講しているので、そこまで問題なく、一とはいえ皆ドイツ語のレベルが高いので困惑しつつ、受講できています。ドイツ語そのものについて色々考え議論するので面白いです。

Mathematik 1 は、物理学部の留学生向けで、英語です。Lectures (講義) と Exercise (演習) で構成されています。この授業では大学に入っすぐのレベルの数学を勉強します。怒濤のドイツ語生活から解放されるので、良い感じの息抜きになっています。あとは、この講義の性質でもありますが、この多国籍な雰囲気がとても好きです。授業そのものも面白いです。この講義は、私の学部とも専門ともかけ離れていますが、もとをたどれば Mitbewohner (ルームメイト) に紹介してもらったものになります。私の Mitbewohner—彼はイタリアから正規留学としてライプツィヒに来ていますが、物理学部に所属していて、私も物理学に興味があると言ったところ、この授業を紹介してくれました。ただそんなわけで、授業登録には間に合わなかったので、聴講として参加しています。

次に語学学校について。

Grammatik B1 文法

Phonetik B1 音声学

Schreiben B1 筆記

をそれぞれとっています。この語学学校というのは、Studienkolleg Sachsen のことで、大学入学前の Sprach- und Orientierungkurs : 語学準備コースもここで行われます。

個人的には、Grammatik と Schreiben の組み合わせがいいと思っています。Grammatik で勉強した文法がそのまま Schreiben で活かせるからです。Phonetik はなんとなくの興味でとりましたが、音について知ることができ参考になります。(分離動詞は前半にアクセントが置かれることなど。) B1 なのでそこまで難しくありません。

この語学の授業は、冬学期が始まる直前くらいの、指定された日付にオンラインで登録することで受講できるようになります。ライブツィヒに通う学生は無料で受けられるのでおすすめです。Sprach- und Orientierungkurs に参加している場合は、同じレベルの授業から、自分の好きなものを選ぶ仕組みです。Sprach- und Orientierungkurs に参加しない場合は、事前に向こうが提供する語学能力の試験をオンラインで受けて、その結果に基づいて、授業が選べるようになります。

学業については以上です。ドイツの大学で講義を受けるとは、どういうことなんだろうと思って、大学が始まるまでは戦々恐々としていましたが、始まってみると面白い授業も多くて思っていたより楽しめていると感じます。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2021/11/29 ～2022/04/18)

訂正

前回、Orientierung-s-kurs のことを、Orientierung-kurs と、間に s を入れずに書いてしまった。正しくは、間に s を入れて、Orientierungskurs だ。ちなみにこの s は Fugenelement という名前で、単語をくっつけるとき、いつもではないが、場合によって必要になる。

さて、報告書前回の続きを書いていく。この報告書は、前半、中間、後半の三つのうち、中間にあたるものだ。

目次

1. 勉学の状況

ドイツ語で授業を受けることの難しさに直面した。

大学の授業について

簡単だった Studienkolleg について

夏学期に取る予定の授業

2. 生活の状況

心境の変化

人と会うことで、冬を乗り切る

冬学期の中の自分

コラム：ドイツのメディア



いくつかあるうち、最大級の大学図書館 アルバーティーナ 街の中心から少し離れたところにある

1. 勉学の状況

ドイツ語で授業を受けることの難しさに直面した。

大学の講義

Stadtentwicklung und Bauwirtschaft, 通称 **StuBa** (都市開発と建築経済)

最も苦戦した授業。

Lexikologie (語彙論)

ドイツ語の単語について分析する授業。理解できる部分もあり面白かったが、やはり試験となると私には難しく、合格点に達することができなかった。

Mathematik 1 (数学)

もともと聴講でとっていたものの、途中からほかの授業で忙しくなり、聴講に行かなくなってしまった。

逆に簡単だった **Studienkolleg** の授業

Grammatik B1 文法

簡単すぎたと感じる。

Phonetik B1 音声学

これも簡単すぎた印象。

Schreiben B1 筆記

個人的に筆記があまり好きではなく、大変だったが、技術的な面—**Zusammenfassung** (要約) についてどういう風を書くべきかなど—で勉強になった。

大学の授業について

全体的にひどい終わり方をしてしまった。主原因は、自分のドイツ語能力の低さだ。特に **StuBa** で、最後のほうに全くついていけなくなり、他のグループのメンバーに頼りきりになってしまった。

とはいえ、冬学期のはじめのほうは、授業を聞いて 50%くらい理解していた。またグループワークも自分のできることをやっていた。しかし、しだいに授業の流れを把握することが困難になり、自分が何をすればいいのかよく分からなくなってしまった。加えて、12月あたりから授業が全面的にオンラインになり、また12月は気分が落ちて、授業に意欲的に参加できなかつたりと、踏んだり蹴つたりであった。最終的に、プレゼンテーションでは、今までの調査の概要を発表する役を担ったが、グループに全く貢献できなかったと感じる。

グループワーク中も、他のメンバーは全員ドイツ人で、彼女たちが高速でドイツ語で会話しているため、私は何も話せずただそこに座っているだけの気まずい体験をした。

こうしたことを踏まえて考えると、もし本当に外国語での授業についていきたいなら、教科書的な知識も必要だが、なにより授業の場数を踏む必要があると感じた。いきなり、グループワーク有りの授業に突っ込むのではなく、聞くだけでいい授業からスタートし、徐々に慣れていき、能動的な授業をとってみる、という流れが必要ということだ。

ただ、なんととっても交換留学は1年（もしくは半年！）しかないのも事実だ。私は、従って冬学期には、当たって砕けるという方針で授業をとった。実際砕けてしまったわけだが、これはこれで一つの経験となった。皆さんが留学をする時も、それぞれが好きな方針で授業をとればよいと思う。

簡単だった **Studienkolleg** について

逆に、ドイツ語自体を勉強する授業は簡単だった。なぜなら、この授業では単純に自分のレベルより少し低いクラスに振り分けられてしまったからだ。そのせいで、冬学期を通して簡単かつ物足りない印象をもった。私は **B1** のレベルの授業を受けていたが、私のように一通り文法をやり終えている人には、**B2** の方が合っていたのではと考える。

残念ながら、この授業のレベルは、勝手に選べるわけではなく、事前に受けるテストの結果と、前の報告書で述べた、冬学期前の **Orientierungskurs** の成績によってきまる。正直、私はテストが好きではなく、要領よく良い点数を得られなかったのと、**Orientierungskurs** で宿題をやり忘れていたりしたことが重なり、レベルを低く見積もられてしまった。なので、皆さんが上級のクラスに入りたいなら、テストと（参加するのであれば）**Orientierungskurs** で、要領よく立ち回ることをおすすめする。

そのほか、大学などがネット上で、無料の言語学習サイトを開設していることがある。「ドイツ語学習 無料 モジュール」などで検索すると、何かが出てくるかもしれない。

また、会話や作文は、授業を受けたほうがいいのかもしいかもしれないが、こと文法や発音に関しては一人ででも上達可能だ。なので、必ずしも授業を受けて勉強しなければならないわけではない。今の時代、書籍やネットを活用し、独学することができる。勉強の道はひとつではないので、皆さんも自分に合う方法を探してほしい。



ライブツィヒの書店には、意外にも、日本の本がいくつか置いてある

左中央、右:ノルウェイの森、海辺のカフカ 右中央:人間失格

あとは、写真には写っていないが、村田沙耶香のコンビニ人間もあって驚いた

上記の経験を踏まえ、この夏学期は“当たってごっけろ”を維持しては、身が持たないと思ったので、もう少し、受動的な授業にとどめる予定だ。ドイツ語の能力もやや伸びたので、授業を受けるだけではなく、本を読むなど自分で出来ることをやりたいと思っている。

夏学期に取る予定の授業

現状以下の二つを考えている。

07-203-1203 Data Science - Grundlagen und Anwendungen

私の所属する経済学部の大学院生向け授業。データサイエンスについての講義で、どちらかというと、初心者向けのように感じたので、取ることにした。勘違いだとしたら、また学期末が大変だ。

Einführung in die Literaturgeschichte

こちらは、文献学部の Germanistik の授業。学部生向け。講義とゼミをセットで受けないといけないようだが、ゼミのレベルについていけそうにないので、聴講という形で講義だけとるかもしれない。

2 . 生活の状況

心境の変化

12 月気分沈み気味

1 月少し回復

2 月日本が懐かしくなる

3 月夏に向けた期待感

4 月一時的な無気力状態

この月ごとの状態だけみると、ずっとふらふら不安定な飛行を続けている印象があるが、もともと自分はそのような感じなので、そこまでの不安はない。いつもの自分がある、という感覚だ。

3月に、日本学科の図書館にいき、村上春樹のノルウェイの森を読んだ。これが原因で、留学前半の自分が終了したように思う。なんだか、我にかえったような感覚で、それが本来の自分に戻るといふことなのかは分からないが、とにかくごちゃごちゃしていたものが収束して、着地した感覚だ。

今は、自分の足で立って、あたりを見わたして、さて、次はどこに行こうか、と思案しているような、そんな状態だ。留学生生活ももうあと、4ヶ月くらいだが、前半で様々な人と出会い、楽しい経験をすることができた。もともと、いつ終わるか分からない、という意識で留学を送っていたので、今はあまり望むことはない。ドイツ語がもう少し向上すればいいと願うくらいだ。



安定のストロベリーアイス ドイツでは少しでも春の兆しが見えたら、光の速度でアイスの店が営業再開する

人と会うことで、冬を乗り切る

前回の報告書の後、12月初頭にオミクロン株が流行し始め、ドイツ国内も行動制限が強化された。具体的には、屋内での ffp2 規格のマスク着用義務、屋内での一定人数以上の集会の禁止、カフェやレストラン入店時の、ワクチン接種証明の提示義務などがあった。また、私のいる東側のドイツでは、感染状況がより深刻だったことから、クリスマスマーケットの中止が相次いだ。ライプツィヒの広場でも、着々と屋台の準備が進んでいたが、あと数日のところで急遽開催中止となってしまった。残念だ。

そんな状況下で、やや気分が沈んでいた。この時期は、しかし、タンデムなどを通して、継続的に人と会い続けたことで、乗り切ることができたと感じる。

当時の私の過ごし方としては、まず比較的大人数とタンデムをやっていた。タンデムは、学生同士などで、互いに自国の言語を教え合うというものだ。当時は週に5~6人とタンデムをしていたので、完全に一人で孤立していたわけではなかった。ちなみに、これは大部分が、日本学科

の人が開いてくれた Tandem-Speed-Matching というイベントで知り合った人たちだ。

また、Studienkolleg Sachsen でのドイツ語を学ぶ授業にて、日本人と会っていたため、これも孤立を防いだ一因といえる。最終的には、この授業もオンラインになってしまったが、12月の途中まではそれでも対面だったので、人と会う機会を作ってくれていた。

また、12月の後半から少しずつではあるが、日照時間が増加に転じたこと、また、“未知の世界”だった冬のドイツの雰囲気、12月を通してなんとなくつかめたことが奏功し、気分が回復した。それまでは、どの程度寒くなるか、またどの程度日照時間が短くなるのか、把握できなかったが、時間がたつにつれ、まあこんなものか、日本の冬と大きさに違うという訳ではない、と思うようになった。

1月は、期末試験に向けて、準備した。特に、StuBa（都市開発と建築経済）に関しては、先に述べたとおり、うまくいかないことが多く、同じグループのメンバーにも少し申し訳なかった。そうしているうち、いつまでもこの冬学期が終わらないような感覚が発生してきたが、やがて1月が終わり、2月上旬に冬学期も終わった。

冬学期の中の自分

冬学期を振り返ると、当初、初めてのヨーロッパ生活の中で、それなりの衝撃を受け、高揚し、冬に少し気分が落ち、やや回復し今に至っている。

人という面では、ドイツ人や日本人と、これまでになく関わった瞬間だった。今はもう慣れてしまったが、当初は、“自分の足でしっかり立って、積極的に人に関わらないと生きていけない”という意識があって、駆り立てられるように人と接していた。これは、大変でもあったが、正直言うと、新しい自分が出現したようでとても楽しかった。なにか冒険するときの高揚感が、そこにあった。

日本にいるときは、全然人と関わらず、どちらかという一人の世界を楽しむ方だったが、どこかで、人と接してみたいという思いがあったと思う。日本の大学は、(海外も同じかも知れないが)最初に仲良くなれないと、後から友達を増やすのが難しい様に思う。なので、自分は大人数で騒ぐタイプではないと思いつつ、それでも少しくらい他の人と関わればいいのにと思っていた。

それが、今回、“生きていかなければ”というエンジンとともに、実現したというわけだ。なかなか楽しかった。留学生は、誰もが新入生のようなものなので、知り合いを作りやすいし、その上、自国の文化が通用しないので、ある意味、文化を内面化しきっていない、子どもの時のような状態で人と関わっていくことになる。この状態を私は楽しんだというわけだ。

こうしてみると、留学前半で、人と会うことを主眼に置いて、やや自分らしからぬ、社交的な生活を送っていたのに対し、後半はどうやら再び、自己完結的な、人と関わりの少ない生活に変化していつているように思う。留学中の自分自身のこのような変遷も、少し面白い。

これについて、次回の報告書でも書きたいと思う。



イースター祭の市場 旧市庁舎はやはりきれいだ

コラム：ドイツのメディア

リスニングの一環として、Podcast の heute journal (ホイテ ジョナル) や YouTube の DW Deutsch (デーヴェー ドイチュ) などを聴いている。

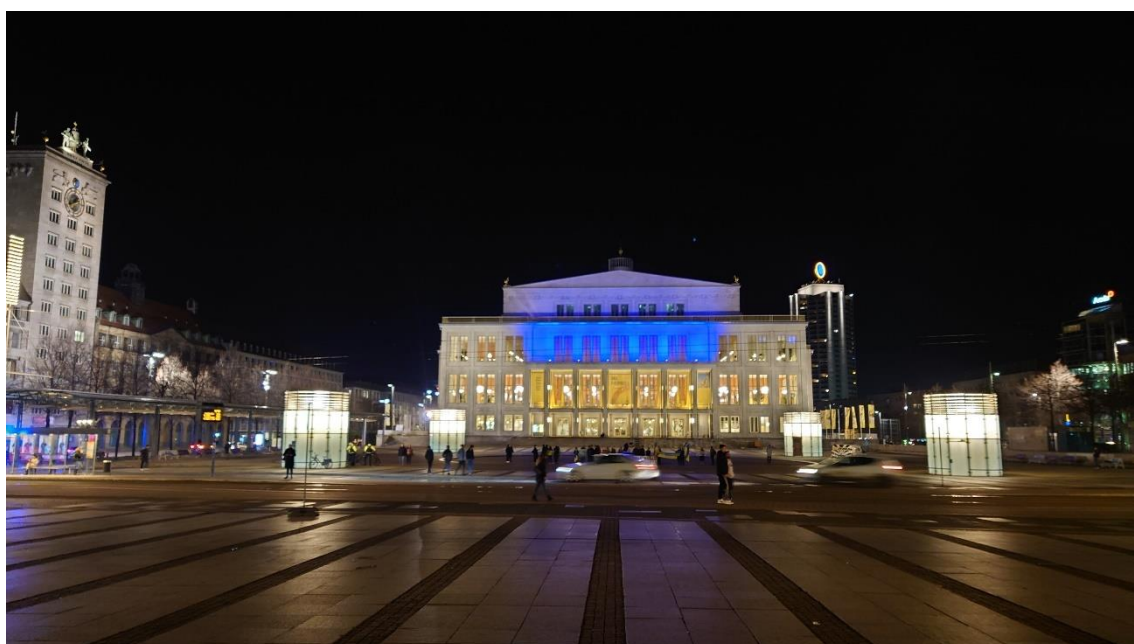
日本と違うなと思うのは、疑問や違和感があったらすぐキャスターが割って入る点だ。DW Deutsch の YouTube に上がっている動画などは、ニュースキャスターがまずテーマを話して、その後専門家に話を聞く、という流れのものが多く、専門家が話している最中に、話題がずれたり、聞きたい趣旨と違う発言があれば、話にかぶせてでもキャスターがすぐ指摘する。日本は、なかなか相手が話している最中に、強引に割って入って、話の軌道修正などはしないと思うので、これはドイツっぽくて面白いと思う。何というか、議論を、余計な回り道をせず、必要最低限のルートで完遂しようとする、みたいな雰囲気だ。効率的だが、効率的すぎて、柔軟性に欠ける印象もうける。

ドイツでは、労働者 1 人あたりの労働時間が短い割に、1 人あたりの GDP は高く、すなわち彼らが効率的に働き、結果として単位時間当たりの生産性が高くなっていることが推測できる。そして、そういう性質はニュースの雰囲気からも読み取れると私は思う。

ちなみに、これはその場で空気が悪くなるということはない。ドイツでは（他ヨーロッパ諸国でも同じかもしれない）、お互いが聞きたいこと、話したいことを「はっきり」伝える傾向にあり、キャスターが割って入ったら、専門家の方も、ああそういうことね、それなら…みたいな感じで話を続ける。ニュース一つとっても、文化の違いが感じられるので、興味があれば、（例え聞き取れなくても）何らかのニュースを見てみてほしい。外国のメディアの雰囲気を感じられるはずだ。



トーマス教会と葉桜



そして、ライトアップされたオペラハウス

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2022/04/19～2022/07/31)

最終報告書がなかなか書けなかった。

理由は、望ましい留学と、自分自身の経験とに、齟齬があったためだ。

望ましい留学の内容は例えば、学業にはげみ、生活面でも色々な人と交流し、経験を深めるような何かだ。典型的な、頑張った留学とっていい。

しかし私の留学はこのようにはいかなかった。

そして、ここが重要なのだが、それにもかかわらず、良かった。

一体なぜだろう。

この二重のずれを上手く言語化できず、ゆえに筆がすすまなかった。

しかし何かを書かなくてはならない。そこで、私はそれでもこの留学をふりかえって、不完全でもいいからそれが何だったのか探ることを試みた。

その中でかろうじて得た推測は以下の通り、すなわち、“望ましさの外に出る”ことこそ、私が求めていたものであり、それを首尾良く達成することで、文字通り私の留学は望ましいものではなくなったが、同時に私を満足させたのではないか、ということだ。

もともと、自分は留学に向いていないと考えていた。

それはさまざまな理由が考えられるが、自分の力では、上記にあげたような望ましい留学を遂行できない、という意識があったと考える。多分、現地の人と上手く関われない。また、留学に行った人が軒並み留学を大成功させているように見えたことも、かえって自分の臆病さを増幅させた。私にはこんなようには行かないだろう、と。

だが、実際行ってみて思ったのは、そういう望ましい姿を気にする必要はないということだ。というより、望ましい留学を遂行できないこと自体に、可能性がある。それは、外側へでるきっかけを与えてくれるからだ。

ここで、改めて望ましい留学を見つめよう。

上記の望ましい留学を、否定する人は少ないだろう。しっかり経験を積んでいる印象がある。

だが、自分から見るとどうだろうか。それは、自分にとって望ましい何かになりえているだろうか。自分に必要なものが、ときとして他人には否定的なようにしか映らないこともある。今まで言及してきた望ましきの背後には、この、第三者からみた望ましきというニュアンスが含まれている。そしてそれはかならずしも、自分にとってよいものとは一致せず、私は従ってこれから逃れたかった。

そしてもうひとつの問題。望ましい留学は、一般的に想像可能な領域に存在している。すなわち、留学に一回も行ったことがないひとでも、考えることができるような何かになっている。

しかしこれは、留学の性質を考えるとおかしい。海外には少なからず、未知のものがあるはずで、そうしたものから影響を受けるのも、留学のひとつの重要な点であろう。にもかかわらず、そうした成果が、行く前から想像できるような何かに収斂してしまう。のぞましい留学は、留学の意義に対し、ひどく矛盾しているのではないか。

さて、私の留学がどうだったかざっくり振り返る。

授業は、前後半ともにそこまで多く取らなかった。ドイツ語を聞き取るのに精一杯で、あれもこれも選ぶわけにはいかなかったからだ。

単位もそれほどとれなかった。途中で断念したり、聴講として出席したりするものが多かった。

他国から来た留学生とは、あまり親しくなれなかった。これは個人的に人見知りしていたからだろう。

ただ少数のドイツ人とは、仲良くなった。フレンドリーに接してくれたので良かった。

振り返ると、ほとんどこれだけだ。あとは、自分で図書館にいて本を読んだりしていた。一般的に留学と聞いて思う暮らしとは全然違うのではないだろうか。しかし、私はこれでも良かったと思っているし、海外でひとりで暮らしきったんだという達成感も感じている。おそらく、この報告書を読んでいる人には、私の言っていることがよくわからないかもしれない。私は思う、そこにおそらく、外側があるのではないかと。行く前の想像の範疇に収斂していない何かがあるのではないかと。

望ましい留学を思い浮かべ、少し臆病になっている人がいれば、それが達成されないことによつてかえって、その外側に気づくことがあるかもしれないと伝えたいと思う。

最後に、もうひとつ述べる。

「迷っているなら、絶対行った方がいい。」同じ学部の先輩にこう言われ、余計に迷ってしまった当時の自分を振り返る。

そのとき、望ましい留学を見事に達成したような先輩に対し、結局自分はそうなれないと思った。しかし、留学を経験してみると、自分にとっても何かしらの発見があった。その一部は、この報告書で述べてきたとおりだ。

したがって、これから留学をめざす皆さんも、望ましきにとらわれず、留学をしてみてもよいのではと思う。

生活

生活面では、前半に比べると目新しさに欠けるが、友達のドイツ人と会ったり、アメリカ人と会ったりしていた。

Riquet という歴史的なカフェで、ドイツ人と会ってタンDEMをした。



アメリカ人の誕生日に少しいい店と一緒に寿司を食べにいった。ライブツイヒで食べたなかで、もっとも美味しかった。



街角のラーメン。



ライプツィヒを去る前に、私のバディだった人と Uni Riese と呼ばれる大学の真横のビルに行き、屋上から景色を眺めた。多くの発見があった。悪くない留学だった。



学業

最終的にとっていた授業は以下の通り

07-203-1203 Data Science - Grundlagen und Anwendungen

経済学部のマスターの授業。データサイエンスの入門のような授業。個人的な興味から受講を決めた。実際にプログラミングはせず、基礎的な概念などを学ぶ。ドイツ語で開かれていたので、何かと不安だったが、なんとなく聞き取ることができた。筆記試験も、ドイツ語で、しかもこれについて論術せよ、みたいな問題もあり面食らったが、なんとかすれすれで単位をとることができた。なかなか面白い経験だった。

04-003-3004 Einführung in die Literaturgeschichte

Philologische Fakultät の、Germanistik という学科の授業。文字通りドイツに関する学科で、この授業はドイツ文学の歴史に関するものだった。当初、講義とゼミをセットで受けようと思っていたが、ゼミがあまりにも難しかったので、断念し、講義だけ聴講した。今までに知らなかった、Sturm und Drang などの文学的時代について知ることができた。

後半は、自分の専攻である都市計画に対し迷いが生じたり、燃え尽き症候群になったりしていたが、それなりに興味のある授業に挑戦し、経験を積めたのは良かった。

また、授業ではないが、一人で図書館に行き、本を読んでいた。図書館の本の並びに、さも当然かのように、有名な書籍が紛れ込んでいる（カールマルクスやマックスヴェーバーなど）のは、ちょっとした感動だった。

また、言語でドイツ語以外にも興味がわき、図書館においてあったチェコ語の参考書を見て、少し勉強したりした。（ドイツ語でチェコ語を勉強するのは、とてつもなく難しかった。）

このような具合で、自分なりに、色々と勉強はしていた。なんだかんだ自分には自習がっているのではと感じた。

最後に

コロナ禍での留学をサポートしてくださった留学生課の方々、私にライプツィヒへ行くきっかけをくれた W.O.さん、ドイツでの生活を助けてくれたライプツィヒ大学の M.Z.さん、その他留学に協力してくださった皆様にお礼を申し上げます。